ORANGE

田辺市立美術館NEWS
Vol.7

渡瀬凌雲《秋立つ春日野》　1952（昭和27）年　　熊野古道なかへち美術館蔵

絵画と出会う「この一点!」　田辺市立美術館

特別展　「創画会60年展」

会期　前期:10月20日（土）～11月18日（日）／後期:11月23日（金・祝）～12月24日（月・休）

稗田一穂《鸚鵡と花》
1951（昭和26）年　田辺市立美術館蔵

稗田一穂（1920～）は1948年に「世界性に立脚する日本絵画の創造」をうたって旗上げされた新しい日本画の団体、創造美術の第1回展、第2回展で続けて奨励賞を受け、新進の画家として注目を集めた。それまでも東京美術学校の卒業制作で川端奨学賞を受け、戦後間もなくに復活した官展、日本美術展（日展）にも入選するなどその実力は発揮されていたが、表現は穏やかなものにとどまっていた。創造美術展への応募を機に、従来の日本画に類型のない制作へ果敢に取り組み、以後も一貫して同時代の感覚を反映する新しい表現を追求し続けている。

《鸚鵡と花》は創造美術の展覧会としては最後となった1951年の第3回創造美術春季展（この年の秋に創造美術は新制作派協会と合同して新制作協会日本画部となり、1974年に再び独立して現在の創画会が結成された。）に出品された作品である。鳥と花の構成というのは伝統的な画題であるが、ここでは色面を主体にした西洋画風の表現でもって夢想的な世界が描かれ、日本画の新しい世界が拓かれている。本作は1953年にニューデリーで開催された第2回インド国際現代美術展にも出品されている。

（学芸員　三谷　渉）

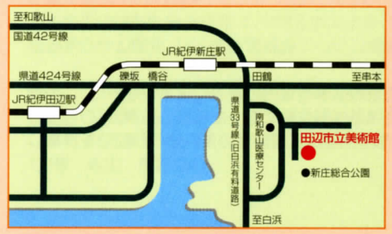
美術館あれこれ⑥　インスタレーション

「森のなかで」展では“インスタレーション（Installation art）”といわれる作品が展示されていますが、このインスタレーションとは通常、アーティストの演出にあわせて空間そのものを展示作品として構成する手法のことを指します。インスタレーションの元々の意味は、「設置する」とか「（装置などを）設定する」というインストール（install）からきています（パソコンにワープロソフトなどを使えるよう導入するときに言われるあれです）。昔は美術館の壁に展示することもインスタレーションと呼んでいたことがあったようですが、一般的には1970年代以降、モダンアートやコンテンポラリーアートに頻繁に現れるようになった表現方法を指します。中国や韓国では「装置芸術」や「設置芸術」と呼ばれることもあります。来館者は一点一点の作品を“鑑賞”するのではなく、その展示物や装置が配置されている空間そのものを“体感”することがその目的とされています。

（学芸員　辰巳　充）

利用案内

田辺市立美術館



■開館時間
午前10時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）

JR紀伊田辺駅から明光バス「新庄病院前」下車、徒歩5分。

〒646-0015
和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770
FAX.0739-24-3771

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館

■開館時間
午前10時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）

JR紀伊田辺駅から龍神バス「なかへち美術館」下車。

〒646-1402
和歌山県田辺市中辺路町近露892
TEL.0739-65-0390
FAX.0739-65-0393

表紙作品紹介　渡瀬凌雲《秋立つ春日野》1952（昭和27）年　熊野古道なかへち美術館蔵

渡瀬凌雲の帝国美術院展初入選となった作品《河口》は、冬の熊野川を描いたものでした。吉野・熊野周辺地域に詳しい画家でもあったため、《河口》が話題になった1932（昭和7）年には和歌山県嘱託として国立公園写生団の一員に任命され、東京などからやってくる大家たちのスケッチ旅行で案内役を務めました。新聞記事によると、画家一行には伊東深水、山口蓬春、野口謙次郎など12名の良く知られた画家たちが名前を連ねています。まだ28歳であった凌雲には貴重な出会いであり経験となりました。吉野・熊野周辺地域は、南画家の凌雲にとって画材の宝庫でした。何度も訪れ、たくさんのスケッチや作品が生まれています。本作《秋立つ春日野》もその一つです。

（学芸員　山本　泰代）

編集後記

今年の夏は例年にない酷暑の日が続きましたが、幸い私は夏バテすることなく過ごすことが出来ました。本館・分館の夏の特別展「森のなかで」では、様々な分野からの作家7人の方々にご来館いただきました。作家自身による展示の様子を間近で見ることができ、時にはお手伝いをすることもありました。この展覧会は、私にとっては森の不思議な魅力について考える良い機会になりました。次号（第8号）は来年4月に発行予定です。平成20年度の展覧会スケジュールもご紙介しますので、どうぞご期待下さい。　（本館Y.M.）

田辺市立美術館NEWS
ORANGE Vol.7
発行年月日:平成19年10月1日
編集・発行:田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館

創画会

現在の日本画の世界を見渡すと、個展を主な作品の発表の場として公募展には出品しない画家も増えてきていますが、大部分の画家は三つの大きな団体、すなわち「日展」、「日本美術院」、「創画会」のどれかに所属し、それぞれの主宰する公募展への出品を軸に活動していることが分かります。

「日展」は1907(明治40)年に初の政府主宰の展覧会機構として発足した「文部省美術展覧会」からの流れをくむもので、戦後に民間の団体となった、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五科からなる国内最大規模の組織です。また「日本美術院」は明治期の代表的な日本美術の研究者、岡倉天心が主導して1898(明治31)年に創立した団体で、以来100年以上の歴史を有しています。

この二つの団体と比較すると「創画会」は若く小さな団体ですが、戦後の日本画の流れをうかがうときには最も大きな存在感を示します。1948(昭和23)年に新しい日本画の表現を志す東西の気鋭の画家、山本丘人、福田豊四郎、上村松篁ら13名によって結成された「創造美術」が「創画会」の源流です。「創造美術」はその後、洋画と彫刻を主とする団体「新制作派協会」と合流して「新制作協会日本画部」となり、1974(昭和49)年に再び日本画の団体「創画会」として独立し、現在に至っています。この流れのなかで意欲的な画家たちが発表した、実験的な試みをもつと同時に高い完成度を示す作品の数々は正に日本画の表現を革新するものでした。

61名の作家、およそ70点の作品によって「創画会」の軌跡を振返る「創画会60年展」が今年から来年にかけて全国五つの会場(日本橋髙島屋・京都髙島屋・田辺市立美術館・茨城県天心記念五浦美術館・浜松市秋野不矩美術館)で開催されます。

(学芸員　三谷　渉)

創画会60年展の図録。販売価格2000円。

田辺市立美術館特別展「創画会60年展」

会　　期／ 前期:10月20日(土)～11月18日(日)
後期:11月23日(金・祝)～12月24日(月・休)

休 館 日／ 最終日を除く毎週月曜日
※11月19日(月)～11月22日(木)は展示替えのため休館します。

観 覧 料／ 一　　般 600円(480円)
大学・高校生 300円(240円)
中学・小学生 150円(100円)
(　)内は20名以上の団体料金。
土曜日は中学・小学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料です。

※記念講演会・公開対談を開催します。
10月27日(土)「起承転結」
上村淳之(画家・創画会理事長)
12月 8日(土)「これからの創画会」
宮いつき(画家・創画会会員)×杉本昌裕(跡見学園女子大学准教授)
いずれも午後2時より研修室にて開催。観覧料のみ必要。手話通訳もつきます。

REPORT 田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館・和歌山県立近代美術館三館合同特別展

「森の中で」

●田辺市立美術館・熊野古道なかへち美術館　7月28日(土)～10月8日(月・祝)
●和歌山県立近代美術館　10月20日(土)～12月9日(日)

草木の緑や鳥のさえずり、そして水のせせらぎが私たちに癒しをもたらす場としての森、私たちの感覚を研ぎ澄ませてくれる瞑想の場としての森、また時として何者をも拒絶する畏怖の空間である森‥‥。

この展覧会は、そのような森からのメッセージをかたちにして、絵画、彫刻、写真、映像などのさまざまなジャンルで活躍する7人の作家たちの作品を紹介します。

ドキドキ少年撮影隊ワークショップ

【日時】8月4日(土)～5日(日)

おもに和歌山市周辺で活動を行っているNPO、和歌山芸術文化支援協会(ワーカス)のワークショップが、今年の夏、本展覧会にあわせて田辺市までやってきました。1日目は世界遺産でもある熊野古道の森を、和歌山市と田辺市のこども達がアーティストの銅金裕司さんと一緒に歩き、2日目は自由な視点で撮ったデジタルカメラの写真を使って自分だけの「森の物語」をつくり上げるという楽しい企画に、約20名の小中学生と10数名の大人が参加しました。古道散策、撮影、制作、発表、おいしい食事。2日間、アートを通じて人のつながりもでき、特別な夏休みになったようです。こどもたちの作品は、熊野古道なかへち美術館で展示されました。

(学芸員　山本　泰代)

ドキドキ少年撮影隊ワークショップで作品を発表している参加者と銅金裕司さん

レセプション

【日時】7月26日(木)　18:30～　　【場所】ガーデンホテル　ハナヨ

作品を出品していただくとともに展示作業などでご尽力いただいた7名の作家の方々をねぎらうため、本展覧会実行委員会の主催によるささやかな交流会を催しました。本展覧会にかかわったスタッフと来賓の方々で作家の先生方を囲み、展覧会の準備や作品にまつわるエピソードなど、貴重なお話を楽しく聞かせていただきました。

(学芸員　辰巳　充)

レセプションに参加いただいた出品作家の方々

展覧会紹介

田辺市立美術館

★小企画展：近世・近代の郷土画人たち(展示室3・4・5)

前期：1月12日(土)～2月11日(月・祝)
後期：2月16日(土)～3月23日(日)

江戸期から明治・大正・昭和にかけて、紀州という風土は数多くの画人たちを輩出しました。その中には、たとえ中央画壇などで名声を得ることはなくても、郷土の地域を中心に眼をみはる活動を続けていた作家たちも多く存在していました。本展覧会では、近世・近代の文人画、日本画、洋画の中から今まで表舞台に立つ機会の少なかった郷土の画人たちを取り上げ、彼らの画業を紹介する機会にしたいと考えています。
展示室1・2では、これまでに当館が収蔵または寄託いただいたコレクションを展示、紹介します。

(学芸員　辰巳　充)

熊野古道なかへち美術館

★館蔵品展：渡瀬凌雲ー凌雲が出会った人々

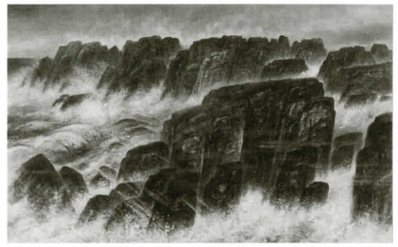
前期：10月27日(土)～11月25日(日)
後期：12月 1日(土)～ 1月14日(月)

支援者のもとで長期逗留して作品を制作したり、先学の師に多くを学んだ渡瀬凌雲のような南画家にとって、出会いは大きな意味を持ちました。この館蔵品展では、人々との出会いを通してみた凌雲の作品と制作について紹介します。

1925(大正14)年、21歳の凌雲は太地五郎作と出会いました。凌雲のため、生涯に亘って家族のような交流と支援をした熊野の名士太地五郎作は、熊野太地浦捕鯨の開祖といわれる和田忠兵衛頼元の子孫でした。捕鯨についての著書も数あり、凌雲はその表紙画や挿絵等を提供しています。

1933(昭和8)年には京都嵯峨天龍寺塔頭弘源寺境内の離れに住まいを移し、この翌年に凌雲は結婚します。当時の天龍寺塔頭慈済院住職であった稲葉心田禅師(のち国泰寺管長に就任)との交流も頻繁になり、慈済院開山堂霊照閣の天井画《雲竜図》を揮毫しました。

(学芸員　山本　泰代)

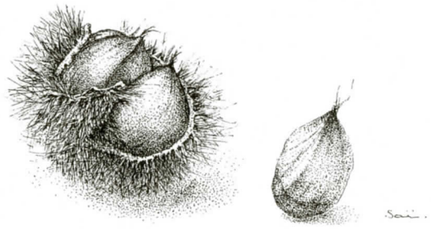

渡瀬凌雲《潮岬》 1967(昭和42)年

★館蔵品展：雑賀清子展

3月1日(土)～4月13日(日)

ここにある作品は版画ではなく、オリジナルの一枚しかない点描作品です。点描はペンを使って描かれます。画家は何種類かの太さのペンを使い分けながら、一点ずつ紙の上においていくのです。そこに印されたインクの太さや形と、隣におかれた点との距離やバランスで、描く対象物が立体として表れ、命が吹き込まれます。ひとつの小さな作品には数百から千を越すほどの点が描きこまれますが、たった一つの点が全体のバランスを左右することもある重要な役割をもっています。雑賀清子は「お前も地球のひとつの点なんだよ。」と自分に言い聞かせながら制作するといいます。自然の再発見と、「よく見る」ことの再発見をしていただければと思っています。

(学芸員　山本　泰代)


雑賀清子《栗》

REPORT 【国際博物館の日】記念公開対談

【日時】4月28日(土)14:00～　【場所】田辺市立美術館　研修室

開催中の「両洋の眼」展に関係するお二人、画家の元永定正さん(出品作家)と美術ジャーナリストの藤慶之さん(両洋の眼委員)にお越しいただいて「国際博物館の日」記念公開対談を開催しました。駄じゃれも飛び交うなど、楽しい対談でしたが、内容には一流の芸術家とジャーナリストならではの奥深いものがありました。最後にはご来場いただいた方々からの質問にもお答えいただきましたし、お二人ともサインにも気さくに応じられていました。こうした美術界の一線で活躍する人たちと身近に接する機会を提供するのも美術館の大切な役割の一つに考えています。

(学芸員　三谷　渉)